

バヌアツについて (第三版)

Vanuatu の国名： Vanuatu はメラネシア語で「我等が国」を意味し、「ヴァヌアトゥ」とフラットに発音する。「バヌアツ人」の呼称（日本人＝「Japanese」に相当）は「Ni-Vanuatu」である。なお、1980年の独立以前の国名は、トーマス・クックが命名したニュー・ヘブリデス（New Hebrides）が使われていた。

バヌアツの国旗： 現国旗は 1980 年の独立の際に制定された。力と神聖のシンボルである野豚の血を表す赤と、自然の豊かさを象徴する緑を上下に配し、バヌアツ人の肌の黒とキリスト教を示す黄色とでバヌアツ列島の Y 字型の配列を描き、三角形の中に富と繁栄を象徴する野豚の環状の牙と、平和を表すナメレの葉を記したものである。



バヌアツの地理： バヌアツ列島は南緯 12 度から南緯 20 度に位置し、南北 1,200 km に伸びる 86 の列島で構成されている。この緯度は北半球ではフィリピンの位置に相当する。インド・オーストラリアプレートと太平洋プレートが衝突している地域で、環太平洋火山帯上にある為、毎年 2cm の割合で上昇が観測されている。従って、サンゴ礁の島国と異なり、地球温暖化による海面上昇で国土を失う恐れは無いが、そのかわりに数年に一度の頻度で被害を伴う地震に見舞われている。

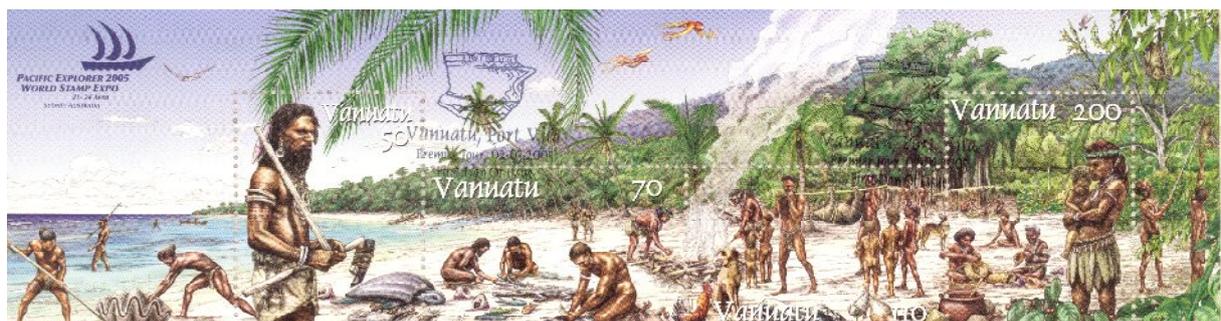
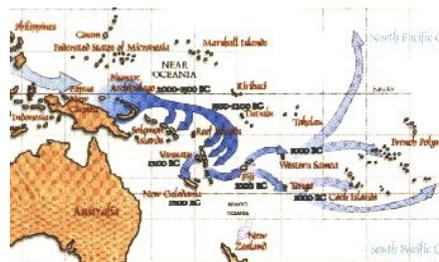


国の総面積は 12 千平方キロで、ほぼ新潟県に匹敵する。首都のあるエファテ島は 3 番目に大きな島だが、それでも佐渡島ほどの大きさでしかない。どの島も海岸から急峻な山稜が立ち上がる若い火山地形特有の様相を呈し、国土の 35% は標高 300m 以上にあり、斜面の 50% は斜度 20 度を超える。人が居住する土地は海岸線に沿った狭い入り江が多く、農耕地可能な土地は限られている。

南北に長く伸びた列島であるため、北端の TORBA 州が熱帯雨林に覆われて年中高温多湿であるのに対し、南端の TAFEA 州では冬期には上着が欠かせない。首都のある Efate 島の気温は、夏季（11 月～3 月）が 28～32 度、冬季（5 月～8 月）が 20～28 度である。夏季の日中は太陽が頭上高く輝き、厳しい暑さとなるが、年間を通して東からの貿易風が吹くため比較的過ごしやすく、一般民家はもちろん、オフィスやホテルでも冷房のないところが多い。夏は雨季、冬は乾季と呼ばれてはいるが、年間を通じて降雨があり、首都ポートビラでは年間の降雨量が約 2400mm に達する。雨季にはサイクロン（南半球の台風）が数年に 1 度の割合で来襲して被害をもたらす。

バヌアツ周辺の国々は、北のソロモン諸島まで約 170km、南西のニューカレドニア（仏領）に約 600km、西のオーストラリア東海岸に約 2,000km、東のフィジーまで約 800km である。日本からの距離はハワイとほぼ同じだが、バヌアツへの直行便がなく、オーストラリアのブリスベン又はシドニー、ニューカレドニアのヌメア、あるいはフィジーのナンディ経由となり、接続が良い場合でも約 18 時間を要する。

バヌアツ人の起源： 南西太平洋地域に広く分布する人種はメラネシア人（「黒い人」と呼ばれ、蒙古系と黒人系の混血と考えられている。彼等はインドシナ半島からフィリピン、パプア・ニューギニア、ソロモン諸島へとカヌーで渡洋し、バヌアツの島々には 3,200 年前（紀元前 1,200 年頃）に渡来した。遺跡からは日本の縄文土器とよく似た土器が発掘され、縄文人と同様に魚介類や野生の動植物を採取して生活していたと考えられる。現在も離島住民の大部分の暮らしぶりは当時の様子をとどめている。



バヌアツの島々に渡来した人々は海岸の狭い入り江に定住して集落を作ったが、火山地形の断崖や濃密な熱帯雨林に阻まれて集落間の交流が乏しく、夫々が持ち込んだ地域的な言語や文化が小さな部族単位のまま継承され続けた。このため部族間の抗争が激しく、敗れた敵を食する風習（Cannibalism）も 19 世紀まで広く行われていたようである。

11 世紀～15 世紀にかけて南東太平洋からポリネシア人も渡来し、やや異質の文化をもたらした。20 世紀になってからは、英国が労働力として移民させた中国人や、フランス人によって移住させられたベトナム系移民も加わり、現在のバヌアツ人が形成されている。現在の人口 20 万人の内、約 95%はメラネシア系である。19 世紀以降に植民地経営で定住した白人の子孫もバヌアツ人として扱われているが、現在バヌアツに定住している白人の大部分は近年になってオーストラリアやニューカレドニアなどから移住した者で、彼等は Expatriates（移住者）と呼ばれている。

バヌアツ人の伝統的社会構造と文化： 上述のように、小規模な部族単位で地域的な言語や文化が継承され、現在も約 110 の部族では、夫々のチーフ(酋長)が強い支配力を持っている。チーフは必ずしも世襲ではなく、部族内の家柄、実力、人望などで定められた階層（ランク）の上位者の中から選ばれる。都市に移住した人達にも出身部族毎の結束が見られ、今も重要な決定には出身地のチーフの裁定を仰ぐことが多いと言われる。独立後の民主的な政治制度の下でも、大統領の選任や、国の伝統文化にかかわる事項は、酋長間で選ばれた大酋長会議に諮問される。

キリスト教化で原始宗教は表面的には衰退したが、今も先祖霊の崇拝が一般的であり、悪霊払い（Black Magic）が色濃く残っている地域もある。また、原始宗教とキリスト教が習合した宗派が流布している地域も一部に見られる。（タンナ島南部のフラム教は、この地に漂着した John Frum と名乗る白人が「近くヨーロッパ人が退散しその代わりに巨大な富が訪れる」と予言し、その直後に米軍が駐留して住民に大量の物資や恩恵を施したことから、Frum を予言者に見立て、伝統的な踊りでキリストの再降臨を祈る宗教となったもので、現在も盛んに行われている。）

食人の奇習は、部族抗争の勝利した際の儀式として高ランクの者だけに許されたもので、1969年にマレクラ島で行われたのが最後といわれている。下の絵は19世紀末にイギリス人画家フレイザーがタンナ島で遭遇し、物かげから覗き見た光景を絵にしたものである。戦勝を祝う長い儀式の後、地面に掘られた大穴に焼いた石を投げ入れてバナナの葉を敷き、ヤム芋（山芋）と共に石蒸しにして供したと記されている。



白人の植民と支配： バヌアツを最初に訪れた西洋人はポルトガル人のペドロ・フェルナンデス・デ・キロスで、スペインの船団を率いて1606年4月にサント島北部に上陸したが、彼はこの地をオーストラリア大陸と見誤ったらしい。1768年にフランス人のルイ・アントワン・ドゥ・ブーガンヴィルがバヌアツ中部の島々を訪れ、1774年にはイギリス人のクック船長が二度目の太平洋航海でバヌアツの殆ど全ての島々を訪れた。1980年の独立まで用いられていた国名のニュー・ヘブリデスや、タンナ、エロマンゴ、アンブリムなどの島名もクック船長が命名したものである。

1825年にアイルランド人貿易商ピーター・ディロンがエロマンゴ島で白檀(Sandalwood)を発見し、この香木を求めて白人達が殺到して、近くの島々でも瞬く間に伐採し尽くしてしまった。白人達は甚だアコギな交易を行ったようで、白人と原住民との間の抗争が絶えなかったという。

白人の本格的な入植は1854年に始まった牧畜業によるもので、これに続いて、当時米国の南北戦争で綿花が口頭したのに目を付けたオーストラリア人が綿花栽培を始めたが、戦争の終結と共に価格が暴落し、その後はヤシ油の採取やココア栽培に転じた。これらは現在も当国の輸出産品の中核であるが、不安定な国際価格のため停滞気味である。右の写真は現在のエファテ島南部のプランテーションの様子である。



キリスト教宣教師が最初に渡来したのは1839年である。当初は原住民に捕らえられて食べられた宣教師もあり、先陣としてポリネシア系宣教師が送り込まれたとも言われる。プロテスタントの長老教会派(Presbyterian)は原住民の伝統文化を厳しく禁じたが、彼等に続いて入ってきた英国国教会やカトリックは伝統文化には比較的寛容であった。

1863年頃から悪名高い「Black Birding」が始まった。これはフィジー島やオーストラリアのサトウキビ栽培やニューカレドニアのニッケル採掘の労働力としてバヌアツ人を狩り出したもので、3ヶ月程度の季節労働と偽って連れ出し、実際には数年間に渡って重労働を課したり、対価としてガラクタを与えたりした。バヌアツに帰国させる際も、適当な島に上陸させて放置するような行為が横行したようで、厳密には奴隷狩りとは呼べないものの、現地人にとって甚だ不当なもの

だった。これが法的に禁止されたのはようやく 1901 年のことで、この禁止には長老教会派の牧師達が熱心に動いたことが伝えられている。現在もバヌアツ人のキリスト教信者の半数近くが長老教会派であることは、この時代の同派の活動とも関係がありそうにも思われる。

1853 年にニューカレドニアがフランス領となり、バヌアツにもフランス人の入植者が急増したが、英国はバヌアツに対してそれ程強い関心を示さなかった。しかし、1882 年にアイルランド生まれのフランス人、ジョン・ヒギンソンが土地管理会社を設立して原住民からの土地の買い上げを進め、10 年後にはバヌアツの利用可能な土地の 55% を獲得した為、仏・英間の勢力争いが表面化した。20 世紀に入り、ドイツがこの地域への進出を画策し始めたのに対抗し、仏・英両国は既得権益維持のための共同統治に合意し、1906 年にその協定が成立した。当時はフランス人 2,000 人、英国人 1,000 人が入植していたといわれている。しかし、共同統治協定が批准されたのは 1922 年のことで、1980 年の独立までこの統治形態が続けられた。

この共同統治はコンドミニウム(The Condominium)と呼ばれ、英・仏の二つの統治機構が並列して夫々勝手に統治するという奇妙なシステムであった。現地人はコンドミニウム統治システムの由来を理解できず、フランス大統領と英国女王が結婚した結果、共同統治になったものと信じられていたという。警察や裁判所も二系統あり、フランスの刑務所では夕食にワインが出るので、捕まるならばフランス警察の方が良い、といった冗談めいた話も伝わっている。

これら白人達と共に欧州から様々な疫病が持ち込まれ、免疫力を持たないバヌアツ人を襲った。19 世紀初頭に百万人いたと推定されるバヌアツの人口は、19 世紀末には 10 万人に激減、1935 年の調査ではわずか 4 万人となった。2 千年に余る歴史を持つバヌアツ人の人口が現在も 20 万人に留まっている背景にこのような歴史があったことは、もっと知られても良いように思われる。

第二次大戦： 旧日本軍は 1941 年 12 月の開戦と同時に南太平洋に急進出し、赤道を越えてソロモン諸島まで版図を広げ、オーストラリアやニュージーランドをも窺いかねない状況となった。

これを阻止するため、米軍は開戦から 4 ヶ月後の 42 年 4 月にエファテ島西部に上陸、日本軍との決戦に備えたが、日本軍はガダルカナル島で補給難に陥り、早くも自滅の道をたどり始めた。この為、バヌアツが戦場となることは避けられたが、後方部隊となったエファテ島とサント島には 10 万を超える兵士が駐留し、当時米軍が建設した道路や飛行場は、現在もバヌアツの重要なインフラとして使用され続けている。



往年の名作ミュージカル「南太平洋」は当時のバヌアツ駐留米軍をモデルに作られたもので、豊かな物資とアメリカ人らしい解放的な軍隊の様子は映画のとおりだったという。米軍は原住民の徴用にも破格の高賃金を払い、医療施設を開放するなど、現地人にとって神の軍隊のような印象を与え、前述のフラム教のような新興宗教さえ生んだ。

米軍は 1945 年の終戦と同時に撤退し、その際に大量の装備や武器類を統治政府に売却しようとして断られ、バヌアツの海岸に投棄した。これらは事故で沈没した徴用船舶等の残骸と共に海底で漁礁となり、今は絶好のダイビングスポットとして重要な観光資源となっている。ちなみに、

September 2006

By S. Shiratori

ポートビラ市内のナンバツ (Nambatu)、ナンバツリ (Nambatri) の地名は、米軍レーダー基地 No.2、No.3 の名残で、米軍病院跡の丘陵地は今もビバリーヒルズと呼ばれている。また、ポートビラのバウアーフィールド国際空港は、日本軍の戦闘機 11 機を撃墜して戦死した米海兵隊のエースパイロット、バウアー少尉を顕彰して名付けられたものである。

大戦後のバヌアツと独立運動： 米軍の駐留でブームとなった町は撤兵と共にゴーストタウンと化した。終戦時点での白人入植者による土地所有は 30%に達していた。その殆どはヤシのプランテーションだったが、彼等は牛肉増産に放牧場の拡大を意図して更に土地の収用を進め、原住民の居住地にまで手を出した為、伝統的な土地所有権を主張する原住民との利害衝突が表面化した。Jimmy Stephens に率いられた原住民の土地所有権主張の運動は Nagreamel と呼ばれ、1960 年代の後半にセント島から他の島々へと拡大して行った。Stephens は 1971 年に国連に対して早期独立の働きかけを進めたが、同年に英国国教会牧師の Walter Lini が率いる New Hebrides National Party (現 Vanua'aku 党) が設立されたため、英国はこの動きを支持して早期独立を進める側に立った。一方のフランスは、これに対抗するかたちで Nagreamel を後押しし、早期独立に反対する立場に回った。フランス側の意図は、コンドミニウム統治の存続を図り、独立が不可避となった場合でも各島の自治権強化を図ろうとしたものであった。

最終的には両国共に独立を認めることになり、1979 年に第一回選挙が行われ、その結果 Vanua'aku 党が勝利し、初代首相に Walter Lini が選ばれた。しかしセント島やタンナ島では根強い抵抗運動が続き、フランスがこれに便乗する動きもあった。しかし Nagreamel の勢力が弱まるにつれてフランスも表面上は反対運動から手を引き、1980 年 7 月 30 日に独立が宣言された。独立後は、オーストラリアが英国を継ぐかたちで政治・経済面での影響力を保つ一方、フランスも仏語系住民への影響力維持を図るなど、今日も両者の間で有形無形のさや当てが続いている。

独立後もセント島やタンナ島などでは不穏な状況が続き、国連軍の派遣も要請されたが、フランスの反対で実現しなかった。この間、両島ではフランスの影の後押によって分離独立の宣言が発せられ、更に北部の離島をも勢力下に巻き込む危険な状況となったが、新政府はパプア・ニューギニアに軍隊の派遣を要請し、Nagreamel の Stephens 逮捕を含む反政府勢力制圧に成功した。

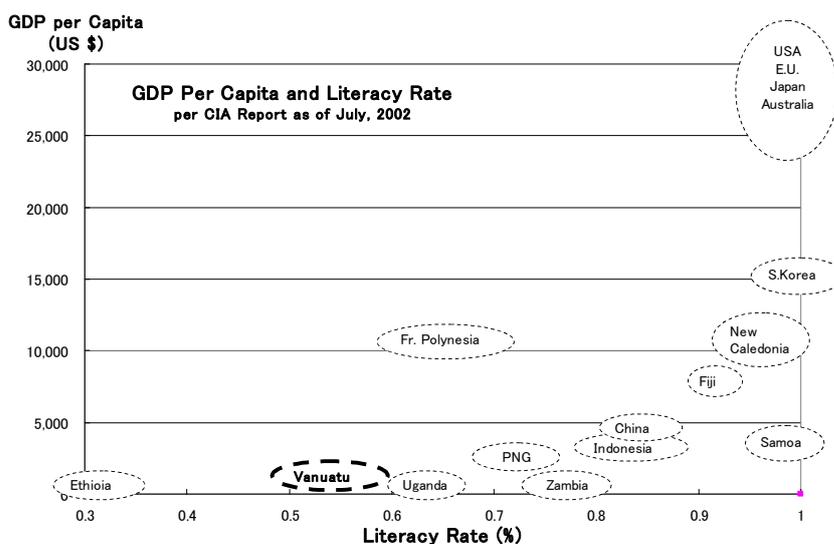
政情不安はその後も続き、1998 年には VNPF (Vanuatu National Providence Fund: 厚生年金) の流用問題を端に反政府活動が発生し、500 名の逮捕者が出た。バヌアツは南太平洋地域の国々の中では比較的政情が安定していると言われているものの、部族抗争を背景に秘めた小党乱立による不安定な連合政権の下で、今も一触即発の危険性が完全に去っているわけではない。

バヌアツの政治形態： 一院制の議会制民主主義で、議会で選出された首相と閣僚が行政を行う。元首は、議会と大酋長会議 (National Council of Chiefs) によって選ばれた大統領で、現大統領は 2004 年に選出された Mataskelekele 氏である。バヌアツを構成する 6 つの州には自治権が認められており、夫々の知事が行政を司るが、州の財政基盤が乏しく、独立行政は名目的と言わざるをえない。主要政党は 8 党あるが、絶対多数政党がないため常に不安定な連立内閣となり、1 年前後で崩壊した例が多い。04 年 11 月に台湾承認問題で不信任となった Vohor 前首相を継いだ Lini 現首相は、独立時の初代首相 Walter Lini の実弟である。

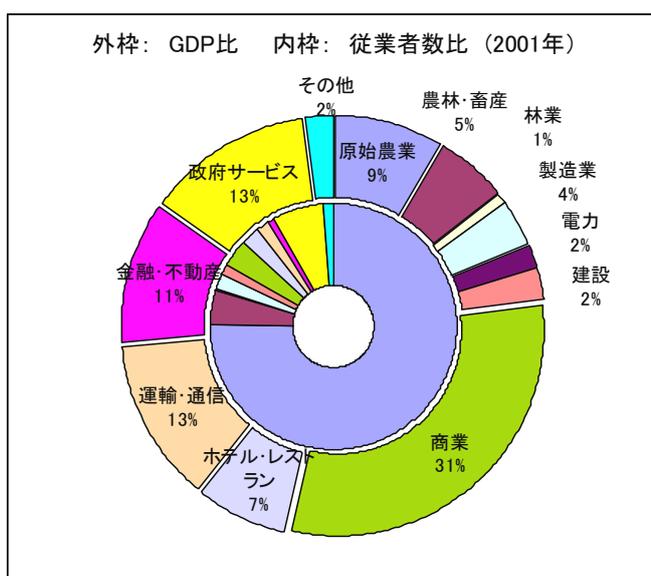
バヌアツ人の宗教： 国民の 80%がキリスト教徒で、その約半数がプロテスタントの長老教会派 (Presbyterian) 信徒である。その他、英国国教会派が 20%、カトリックが 20%を占める。熱心な信者が多く、休日に教会に礼拝に出かける習慣が定着している(写真は村部の長老教会)。バヌアツ人は優れた音感と声を持っており、教会では現地風アレンジされた賛美歌やゴスペルが盛んに歌われている。食事前の祈りは言うまでもなく、ビジネスの会議でも、開会と閉会時に指名されたリーダーが祈りを捧げる習慣がある。



バヌアツの国情： 下表は、一人当たり GDP と識字率の国際比較である。一人当たり GDP(国内総生産高)は先進諸国の 10 分の 1 以下で、世界の最貧国の一つに数えられているが、飢餓を伴う悲惨な状況があるわけではない。天然資源は何も無いものの、天然の食料はあり余っている。少ない人口で天の恵みをたっぷりと受けて、縄文時代さながらの生活も惨めとは思っていない。今の世に浮世離れした「南太平洋の最後の楽園」という一面は、2006 年 7 月に発表されて話題を呼んだ「幸福度指数」でバヌアツが世界トップにランクされたことにも表れている。



経済の現状： 右図の外枠は、2002 年度 GDP (国内総生産) 1,730 億バツ (≒同億円) の内訳を産業毎の比で示したものである。途上国にもかかわらず、国内で発生する付加価値の 2/3 がサービス産業によってもたらされているが、これは国の経済が観光と金融センター (タックスヘブン) によって支えられていることを示している。内枠は就労人口 (7 万人) に占める各産業の就業者数の比を示したもので、GDP の 9%にすぎない自給的粗放農業の従事者が全労働人口の 75%を占める。



しかい、経済活動の殆どは外国人居住者が所有・経営するビジネスによるもので、バヌアツ人が経営する民間企業で従業員 5 名を越えるものは数えるほどしかない。バヌアツ人が経営する商業の殆どは極めて零細な商店で、運輸業も個人営業タクシーやマイクロバスの運転事業である。

首都圏の給与生活者の一家庭あたり平均月収は6万円程度である（日本のほぼ40年前の水準）。村部では原始共同体的な暮らしが色濃く残っているが、貨幣経済の急速な浸透に伴って現金収入を求めて都市圏への人口流入が進行しており、都市での失業や環境悪化の深刻化が懸念される。

外貨獲得手段として観光事業が大きな比重を占めるが、客の殆どがオーストラリア・ニュージーランドからの大衆的なツアー客で、客単価が低く、しかも売上の大部分は外国人経営のホテルや免税品店に吸い上げられている。空港施設の制約から大型機の乗り入れが出来ないこともあり、近隣国での乗り継ぎが不可避で、航空運賃も高い。当面は観光収入の大幅拡大は期待できないだろう。輸出産業はヤシ油を中心とした農産物や林産物の低次加工品に限られているが、この国の長期的な経済発展には、これらの付加価値を高める努力を地道に進める他、合理的な方策が見当たらないように思われる。一方で生活の近代化に伴って食品や消費財の輸入が急増しており、社会インフラの整備促進への圧力も加わって、貿易バランスの更なる悪化や、国家財政の赤字化が急進する恐れもある。

以上のように、経済の高度化には前途遼遠の感があるが、20万人の国民が豊かな自然の中で平和に暮らして行く上で、とりたてて差し迫った課題があるわけではない。国際経済に振り回されて緊張度の高い生活を強いられている我々から見ると、むしろバヌアツの置かれている環境がうらやましく思われる面もある。しかし、今はバヌアツ人の大半がテレビ・新聞もない情報から隔絶された環境に置かれているが、貨幣経済が浸透し、情報化の進展によって先進諸国の人々の経済的豊かさを知るにつれ、社会的な歪みが増幅され、性急な道を求めようとする者が力を得る可能性がある。また、そのような状況に乗じる外国勢力の出現は、過去の歴史が示すところでもある。

教育事情： 1999年国勢調査によれば、就学期間6年未満（就学経験のない者を含む）が全国民の約8割を占める。義務教育を従来の6歳～12歳から6歳～14歳に延長することが決まったが、校舎の増設や教員育成を外国の資金援助に待つ事情もあり、完全実施までには相当な時間を要するだろう。また、義務教育は原則無償と言いながらも、公的資金の不足から父兄には様々な名目で費用負担があり、経済的事情で義務教育さえもドロップアウトする児童が今も少なくない。

10歳以上のバヌアツ人の最終学歴データ（1999年国勢調査による）

最終学歴	都市部	村部	合計	都市部内%	村部内%
就学経験なし	1.2%	16.6%	17.8%	5.2%	21.6%
幼稚園まで	0.1%	0.4%	0.5%	0.4%	0.5%
6年生まで(義務教育)	9.8%	45.1%	54.8%	42.4%	58.7%
10年生まで	6.6%	9.9%	16.5%	28.6%	12.9%
13年生まで	2.5%	1.5%	3.9%	10.8%	2.0%
職業訓練校(7年生から)	0.9%	1.0%	1.9%	3.9%	1.3%
専門学校(11年生から)	0.7%	1.6%	1.3%	3.0%	2.1%
大学(中途者を含む)	1.0%	0.3%	1.3%	4.3%	0.4%
回答なし	0.4%	0.9%	1.3%	1.7%	1.2%
合計	23.1%	76.9%	100%	100%	100%

(日本の昭和 35 年度 (1960 年度) データでは、義務教育就学率 (9 年生相当) 99.9%、高校進学率 57.7%、大学等進学率 (短大を含む) 17.2%であった。)

学校教育は全て英語又はフランス語で行われているが、現地人教師の質が十分とは言えず、言語能力の不足が学力全般のレベル向上に大きな制約となっている。識字率は 74%まで向上したが、知的労働に耐える人材の基盤強化には母国語教育の改革が必要であろう。英語、仏語と共に公用語のひとつとなったビスラマ語は、バヌアツ人の殆どが日常的に使用しているが、これは 19 世紀に白人との交易の必要から発生した英語ベースの実用言語で、発音、表記方法、文法は未だ標準化されていない。ビスラマ語の学校教育への採用にはフランス系からの強い反発があるが、教育現場ではなし崩し的に導入されているようである。国の発展には国民の全般的な教育レベル向上が必須である。初等教育、中等教育や職業訓練の各分野で、欧米諸国や日本からの支援も多面的に行われているが、国が確固たる方針に基づいた継続性のある施策を行うことが必須と思われる。

海外援助： オーストラリア、EU (仏主体)、ニュージーランド、日本などが、教育や地域開発を中心とした地道な支援を進めてきたが、最近是中国の活発な動きが目立つ。公的建築物の寄贈や閣僚用高級車の供与など、PR 的活動も巧みである。昨今はバヌアツ政府が何かにつけて中国を頼りにする傾向も窺えるが、旧アジア的な政治腐敗に陥らない注意も必要であろう。

日本との関係について： 日本との貿易額は、バヌアツ側の統計によれば、対日輸出が 2 億円、輸入が 5 億円のレベルに留まり、進出企業も現在は食肉関係の 1 社のみと聞いている。バヌアツへの経済援助は、無償資金協力がこれまでの累計で約 75 億円、技術協力が累計で約 35 億円である。無償資金協力案件の主なものには、ポートビラ国際空港施設、エファテ島周回道路改良、橋梁建設などがある。技術協力では、JICA (国際協力機構) によるボランティア派遣があり、下表に示したように、青年協力隊員、専門家、シニアボランティア計 30 名がバヌアツ各地で活動している。(06 年 9 月現在)

青年海外協力隊員	男 9 名、 女 9 名	初等教育 9 名、日本語教師 3 名、体育指導 1 名、村落開発 2 名、感染症対策 1 名、電気設備 1 名、プログラムオフィサー(教育)1 名
専門家	男 2 名、 女 1 名	援助調整 1 名、水産資源開発プロジェクト 2 名
シニアボランティア	男 9 名	コンピューター教育・研修 3 名、日本語教師 1 名、理科教育 1 名、観光開発 1 名、予防接種拡大 1 名、情報管理システム 1 名、経営管理 1 名

隊員の任期は原則として 2 年間で、約 1 ヶ月の現地研修の後、各機関に配属されて活動する。筆者はシニアボランティア (経営管理) としてバヌアツ商工会議所に所属し、同所のビジネス研修事業の指導を担当している。